

上 荒 谷 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

1996

かみ あら や  
上 荒 谷 遺 跡

発掘調査報告書

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



SK23墓塚遺物出土状況



深鉢（縄文前期）

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、上荒谷遺跡の調査成果をまとめたものです。

上荒谷遺跡は山形県の中央部東端に位置する天童市にあります。天童市は県都山形市の北に接し、東に奥羽山脈から連なる山々がそびえ、西側を最上川が北流しており、温泉と果樹・将棋の駒の生産で知られています。

この度主要地方道天童寒河江線地方特定道路整備事業に伴い、工事に先立って上荒谷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では縄文時代前期の土器・石器などの遺物や、竪穴住居跡や墓塚などの遺構が検出され、当時の生活や信仰の様子的一端を知ることができました。この縄文時代前期の遺跡は県内では調査例が少なく、貴重な資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場清耕

## 例 言

- 1 本書は、主要地方道天童寒河江線地方特定道路整備事業（荒谷工区）に係る「上荒谷遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名 上荒谷遺跡（CTDKA） 遺跡番号 232

所 在 地 山形県天童市大字荒谷字上荒谷

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査期間 発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日

現地調査 平成7年5月8日～平成7年6月30日

### 発掘調査・資料整理担当者

調査第一課長 佐々木洋治

主任調査研究員 尾形典典

調査研究員 須賀井新人

調査研究員 高桑 登

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県山形建設事務所、天童市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関並びに天童市の方々から協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は須賀井新人、高桑 登が担当した。編集は尾形典典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。  
遺物実測の一部については、株式会社シン技術コンサルに委託した。  
リン・カルシウム分析は株式会社バリノ・サーヴェイに委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SK…土壌	SP…単独のピット	ST…竪穴住居跡
SG…河川跡	SX…性格不明遺構	EP…柱穴
RP…完形・一括土器	RQ…石製品	

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は $N-20^{\circ}-W$ を測る。
- (3) 遺構実測図は $1/20$ 、 $1/40$ 、 $1/60$ 、 $1/80$ で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図、土層断面図中のスクリーントーンは、石・礫(S)、焼土、攪乱層を示し、各々注記した。
- (5) 遺物実測図・拓影図は $1/3$ で採録し、各々スケールを付した。遺物図版は土器については $1/3 \cdot 1/2$ 、石器については $2/3$ を基準とした。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺構観察表・遺物観察表中の( )内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の概観	
1 立地と自然環境	2
2 歴史的環境	5
3 層序	5
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	6
2 竪穴住居跡	6
3 土壌	9
4 溝跡	12
5 河川跡	12
IV 出土した遺物	
1 縄文土器	15
2 石器	24
V まとめと考察	
1 遺構について	30
2 遺物について	30
報告書抄録	32
附編「上荒谷遺跡SK23のリン・カルシウム分析」	53

## 表

表1 遺構観察表	14
表2 縄文土器観察表(1)	22
表3 縄文土器観察表(2)	23
表4 石器観察表	29

## 挿 図

第1図	遺跡位置図	2
第2図	調査区概要図	3
第3図	遺構配置図	3
第4図	遺跡層序断面図	5
第5図	ST1 竪穴住居跡	7
第6図	ST2・3 竪穴住居跡	8
第7図	SK23・21土城	10
第8図	SK25・26・SX27 SK22・SK42 SK45・SD46 SK49夷測図	11
第9図	SD31溝跡	12
第10図	SG4 河川跡	13

第11図	縄文土器(1)	17
第12図	縄文土器(2)	18
第13図	縄文土器(3)	19
第14図	縄文土器(4)	20
第15図	縄文土器(5)	21
第16図	石器(1)	25
第17図	石器(2)	26
第18図	石器(3)	27
第19図	石器(4)	28

## 図 版

巻頭図版1	SK23基壇遺物出土状況 深鉢（縄文前期）
図版1	遺跡遠景、調査前状況
図版2	調査風景
図版3	遺跡層序 北側調査区遺構検出・完掘状況
図版4	南側調査区遺構検出・完掘状況
図版5	ST1 遺物出土状況他
図版6	ST2 土層断面・完掘状況
図版7	ST3 土層断面・完掘状況
図版8	SK23遺物出土状況他
図版9	SK21遺物出土状況他

図版10	縄文土器(1)
図版11	縄文土器(2)
図版12	縄文土器(3)
図版13	縄文土器(4)
図版14	縄文土器(5)
図版15	縄文土器(6)
図版16	縄文土器(7)
図版17	縄文土器(8)
図版18	石器(1)
図版19	石器(2)





## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

上荒谷遺跡は、縄文時代前期の土器出土地として山形県内陸地方において最初に発見された遺跡である。昭和28年、耕作中に多数の土器や石器が出土したのを契機に、昭和29年、34年の両年に山形大学教育学部歴史学研究室において発掘調査が行われた。昭和34年に行われた発掘調査では安山岩の礫群を組み合わせた石器製造跡が検出されている。昭和53年に刊行された「山形県遺跡地図」にNo.232で登録され、一般に周知されるようになった。

この地域に主要地方道天童中山大江線整備事業が計画されたため、平成3年11月山形県教育委員会では分布調査（表面踏査）を行った。その結果、遺跡の範囲は河岸段丘上の東西250m×南北150mにおよぶ約37,500㎡であることが確認された。平成6年6月、流域下水道整備にともなう下水管理設部分の試掘調査を行い、遺構検出面までの深さや遺物包含層の厚さを把握、同年10月には現道下にかかる下水管理設部分の立ち会い調査を実施した。これらの調査の結果、竪穴住居跡2棟のそれぞれ一部やほかの遺構が確認され、縄文時代前期前半の集落跡であることが確認された。

以上の調査資料をもとに、関係機関による協議が行われた結果、主要地方道天童寒河江線地方特定道路整備事業（荒谷工区）に先立ち、山形県埋蔵文化財センターが主体となって記録保存を目的とした緊急発掘調査を行うことになったものである。

### 2 調査の経過

調査は、平成7年5月8日から6月30日までの実質38日間行った。上荒谷遺跡推定面積約37,500㎡のうち事業に係る1,700㎡を調査対象としている。

今回の調査では生活道路の確保のため調査区を南北に分けて調査を行った。計画路線のセンターラインから北側を前期調査区、南側を後期調査区とした。

5月8日、発掘器材搬入、現場事務所設営、重機による調査区内の表土除去。9日から表土除去と並行して、面整理作業を行う。また、東西に長い調査区を5m毎に区切るための杭打ち作業を行い、前期調査区をN1～34グリッドに区分した。18日、遺構検出状況撮影、平面図作成。19日～31日、遺構精査、遺構平面図・断面図作成、写真撮影、完掘状況平面図作成。SK23より完形土器出土。6月1日、完掘状況平面図作成と並行し、グリッド杭、防護フェンス等の撤去作業。前期調査区の調査が終了する。2日～7日、前期調査区の埋め戻しを行い、仮設道路の付け替え、後期調査区の表土除去。8日～15日、面整理、グリッド杭打ち作業を行い、後期調査区をS1～34グリッドに区分した。遺構検出状況の写真撮影、平面図作成。竪穴住居跡3棟を検出する。19日～23日、西半部から遺構精査に入り、随時、遺構平面図・断面図作成、写真撮影を行う。ST1より一括土器出土。21日～23日、西半部完掘状況平面図作成。並行して東半分の遺構精査に入る。27日、調査説明会開催。28日～30日、引き続き東半分の遺構精査、記録作業を行う。30日、器材と現場事務所の撤去を行い、現地調査を終了した。

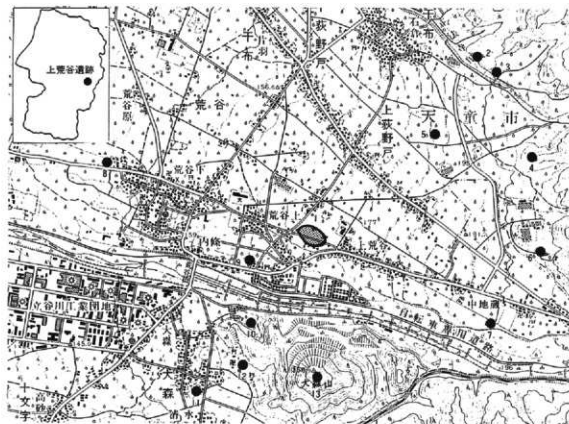
## II 遺跡の概観

### 1 立地と自然環境

上荒谷遺跡は山形県天童市大字荒谷字上荒谷に所在する。天童市は、東を奥羽山脈、西を出羽山地に挟まれた山形盆地の東部にある。天童市と寒河江市の境界を成す最上川へ向かって、奥羽山脈から乱川、押切川、立谷川が流れ、これらの河川はいずれも扇状地を形成している。天童市域は、山形盆地最大の扇状地である乱川扇状地南半と立谷川扇状地北半にまたがり、市域の約4割を山地が占めている。立谷川は近世以降も度々氾濫を繰り返した。そのため、扇状地のうち山形市域となる南半部は、氾濫による堆積物に覆われているが、遺跡を含めて北半部の天童市域は、比較的安定した地盤であった。

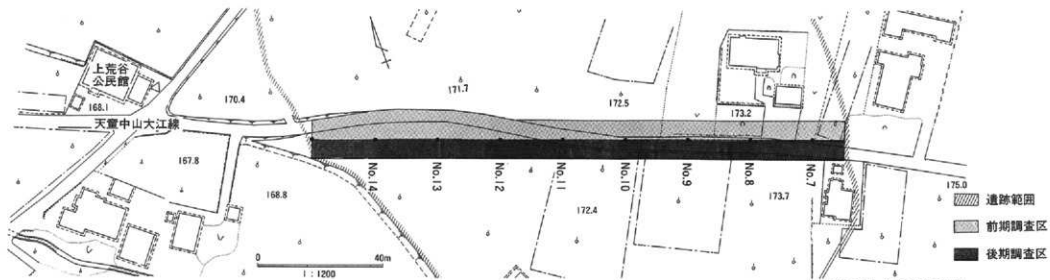
山形盆地は南北に長く、内陸性の気候が明瞭に表れる。気温の寒暖の差が大きいこと、降水量、特に積雪が少ないこと、日照時間が長いこと、風が弱いことなどである。このような穏やかな気候によって、現在は果樹の栽培が盛んとなっている。

上荒谷遺跡は、立谷川扇状地扇央部の河岸段丘上に立地している。標高は最高部で174m、最低部で170mを測り、南東から北西にかけて傾斜している。遺跡付近は盆地に突き出た扇状地のうち、ひときわ高い地形を成している。対岸には大森山がそびえる。山地と盆地の接触線上にあり、付近に川の流れる立地条件は狩猟・採集の生活に適していたと思われる。



- |                  |                   |                 |                |
|------------------|-------------------|-----------------|----------------|
| 1 上荒谷遺跡 (縄文前期)   | 2 佐見平遺跡 (縄文中期)    | 3 正法寺遺跡 (縄文中期)  | 4 石遠山遺跡 (縄文中期) |
| 5 宮田遺跡 (縄文後～晩期)  | 6 雫山遺跡 (縄文中期)     | 7 地藏堂遺跡 (縄文中期)  | 8 荒谷下遺跡 (縄文中期) |
| 9 上荒谷土壇遺跡 (鎌倉)   | 10 大森A遺跡 (縄文後～晩期) | 11 大森B遺跡 (縄文前期) |                |
| 12 大森山古鎮出土地 (鎌倉) | 13 山形大森山経塚 (鎌倉)   |                 |                |

第1図 遺跡位置図 (S=1:25,000)



第2図 調査区概要図



第3図 遺構配置図

## 2 歴史的環境 (第1図)

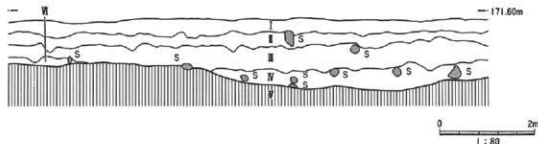
上荒谷遺跡の周辺には数多くの縄文時代の遺跡が分布している。天童市内の遺跡の分布状況を見ると、草創期の遺跡は発見されていない。早期の遺跡は押切川上流域の山麓部で標高490mと比較的高所に位置している。前期の遺跡は、立谷川扇状地の扇中部、乱川扇状地扇端部など、扇状地上に立地している。立谷川をはさんで上荒谷遺跡と対称となる位置に、ほぼ同じ時期の大森B遺跡(第1図-11)があり、遺跡群を構成している。中期になると遺跡の数が増え、ほとんどの地域に分布域が拡大する。第1図からも、伝覚平遺跡(2)、正法寺遺跡(3)、石達山遺跡(4)、南山遺跡(6)、地藏堂遺跡(7)など、山麓部にまで居住域が拡大した様子がうかがえる。これらの遺跡は主に大木8~9式の遺物が出土している。後期の遺跡は、東部丘陵、押切川中流域河岸段丘、乱川・立谷川扇状地先端部、沖積平野部に分布する。晩期の遺跡の分布は後期と似るが、山麓部に分布するものはやや低地の方に立地する傾向を持つ。第1図-5の宮田遺跡は、奥羽山系よりのびる丘陵緩斜面に立地する。後期中葉から晩期初頭の遺物が出土しており、また土製の勾玉が出土している。

その他、縄文時代以降の遺跡として、上荒谷土壇遺跡(9)、大森山古銭出土地(12)、山形大森山経塚(13)など、中世鎌倉期の信仰に関わる遺跡が集中していることが注目される。

## 3 層序 (第4図、図版3)

第4図はN16・17グリッド北壁の土層を実測したもので、これをもとに遺跡の基本層序を述べる。

- 第I層 10Y R2/2黒褐色砂質シルト  
(10Y R3/3暗褐色シルトを粒状に少量含む。耕作土。)
- 第II層 10Y R1.7/1黒色砂質シルト
- 第III層 10Y R2/2黒褐色砂質シルト  
(土器片を含む。遺物包含層。)
- 第IV層 10Y R2/2黒褐色砂質シルト  
(礫を多量に含む。遺物包含層。)
- 第V層 10Y R5/6黄褐色シルト質砂  
(地山。礫を含む。)



第4図 遺跡層序断面図

### III 検出遺構

#### 1 遺構の分布 (第3図)

調査区の南東部から中央部にかけて、緩やかに蛇行しながらSG4河川跡が縦断する。SG4の南側には比較的地盤の安定した微高地が形成され、この微高地上から多くの遺構が検出された。

竪穴住居跡はS16・17グリッドでST1が検出され、S22～24グリッドでST2・3が隣接して検出された。今回の調査でつながりを確認することはできなかったが、平成6年の立ち会い調査でも、S23・24グリッドに当たる位置で竪穴住居跡2棟の一部が検出されている。ST2の北約5mの位置からは墓塚が検出されている。住居跡の分布する地区の東西には土壌やピットが密集して検出された。S25グリッドの南壁やN6グリッドの東壁には良好な遺物包含層の堆積がみられ、この付近にも遺構の存在を想起させる。竪穴住居跡や土壌など、ある程度のまとまりを持って分布し、土地利用の何らかの規制があったと思われる。調査区西端部のSD31から西、東端部のN1グリッドから東は礫層に覆われ、遺構、遺物ともに分布が希薄となっている。

#### 2 竪穴住居跡 (第5・6図、図版5～7)

今回の調査では3棟の竪穴住居跡が検出された。3棟とも下水管理設等による破壊のためプラン全体を確認することはできなかったが、平面形態は隅丸方形であると思われる。主軸の方向はST2・3がN-36°・39°-Wと近い数値を示すのに対し、ST1はN-19°-Wを測る。遺物の出土状況を見てもST1が突出した様相を呈しており、これらの相違が注目される。各竪穴住居跡の規模等の実測値は表1に示し以下にそれぞれの概要を述べる。

##### ST1

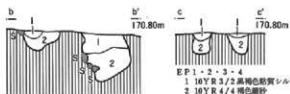
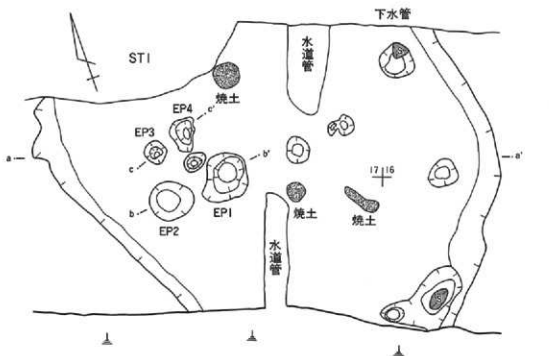
北東部は破壊されており、西南部は調査区外のため未検出である。北東から南西にかけて水道管によって攪乱されているが遺物の残存状況は良好であり、ほぼ完形に復元可能なものを含む多数の土器片が出土した。石器は完成品が5点、石器製作にともなう剝片も数多く出土している。床面はほぼ平坦であるが、東半部に落ち込みと礫が分布している。主軸に沿って3カ所に床面に火を受けた跡が残り、中央やや北寄りに焼土塊が残る。柱穴状のピットは西半部に4基検出されている。

##### ST2

北東部は破壊されており、西南部は調査区外のため未検出である。遺物は剝片が4点出土している。柱穴状のピットは中央部に1基検出された。床面は平坦であるが全体に小礫が分布する。

##### ST3

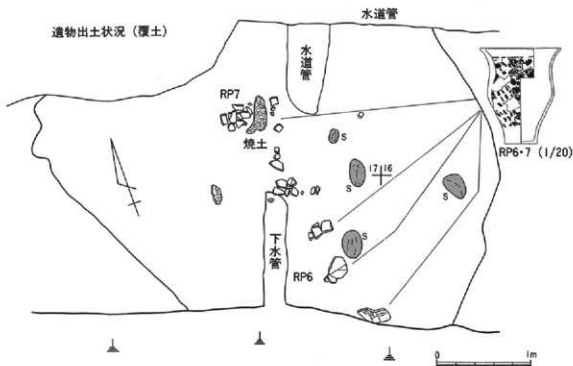
北西隅は破壊されており、西南部は調査区外のため未検出である。遺物は剝片が5点出土している。主軸に沿って柱穴状のピットが2基検出された。床面は平坦であるが全体に小礫が分布している。北東部に壁溝が検出された。



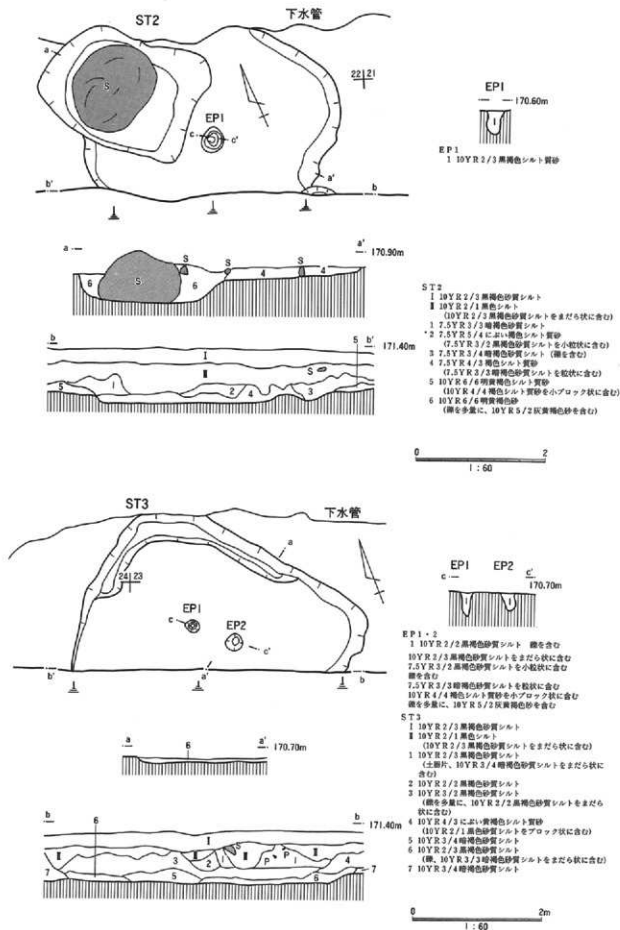
ST1

- 1 10Y R 2/2 黒褐色粘質シルト (10Y R 2/1 黒色シルトをまじら状に含む)
- 2 10Y R 3/2 黒褐色粘質シルト (10Y R 1.7/1 黒色シルトをブロック状、
- 3 10Y R 5/6 黄褐色砂をまじら状に含む)
- 3 10Y R 1.7/1 黒色シルト (10Y R 2/2 黒褐色粘質シルトを一部含む)
- 4 10Y R 2/3 黒褐色粘質シルト (隙を含む)
- 5 10Y R 2/3 黒褐色粘質シルト
- 6 5 Y R 2/3 暗褐色粘質シルト質砂 (7.5Y R 3/2 黒褐色粘質シルトを含む)
- 7 10Y R 3/4 暗褐色粘質シルト
- 8 10Y R 3/3 黒褐色粘質シルト (10Y R 2/4 暗褐色粘質シルトをブロック状に含む)
- 9 10Y R 2/3 黒褐色粘質シルト (10Y R 2/1 黒色シルトをブロック状に含む)
- 10 5 Y R 3/6 暗褐色粘質シルト質砂
- 11 10Y R 2/2 黒褐色粘質シルト
- 12 10Y R 5/5 黄褐色砂 (10Y R 3/3 暗褐色粘質シルトを含む)

遺物出土状況 (覆土)



第5図 ST1 竪穴住居跡



第6図 ST2・3竪穴住居跡



## 3 土壌 (第7・8図、図版8・9)

S K 23 N21・22グリッドに位置し、S X 27を切る重複関係にある。長軸144cm、短軸96cmの楕円形の平面形態を持つ。北半部が円形に落ち込んでおり、ここから多くの遺物が出土した。落ち込み部の底面は凹凸があり、礫が分布する。壁の立ち上がりは急で、検出面からの深さは53cmを測る。落ち込み部からは、底部を打ち欠いた深鉢 (R P 1) が倒位で出土した。覆土内から底部の破片も出土している。また副葬品と思われる大型の石罎 (R Q 5) が出土した。これらの様相から墓塚であると思われる。この他の出土遺物は土器が22点、剥片が10点であった。

S K 21 N13グリッドに位置する。長軸70cm、短軸56cmの円形の平面形態を持つ。S G 4に隣接するため、底部に礫が密集して分布する。壁の立ち上がりは急で、検出面からの深さは32cmを測る。南側壁際の底面から1個体分の小型深鉢形土器 (P R 2・3) の破片が出土した。石器は完成品1点を含む28点が出土している。

S K 25 N22グリッドに位置する。長軸48cm、短軸34cmの楕円形の平面形態を持つ。底面は平坦、壁の立ち上がりは緩やかである。検出面からの深さは11cmを測る。土器片2点、剥片1点が出土している。

S K 26 N22グリッドに位置する。長軸42cm、短軸36cmの不整形の平面形態を持つ。壁の立ち上がりは南西側が急で、北西側が緩やかなすり鉢状を呈する。検出面からの深さは26cmを測る。遺物は出土していない。

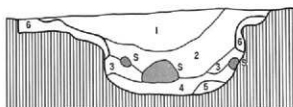
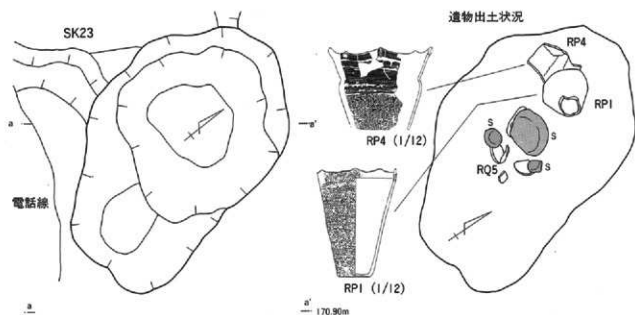
S X 27 N22グリッドに位置する。北端部をS K 23に切られる重複関係にある。長軸256cm、短軸166cmの不整形の平面形態を持つ。南西部を電話線によって破壊されている。床面は平坦、壁の立ち上がりは急である。検出面からの深さは25cmを測る。土器片が2点、石器は完成品1点を含む6点が出土している。

S K 22 N13グリッドに位置する。長軸98cm、短軸88cmの円形の平面形態を持つ。S G 4に隣接するため、底部に礫が密集して分布する。壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは18cmを測る。土器片が18点、剥片が7点出土している。

S K 42 S 2・3グリッドに位置する。長軸142cm、短軸76cmの楕円形の平面形態を持つ。南半部は電話線によって破壊されている。底面は平坦だが礫が分布する。壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは36cmを測る。土器片が7点、石器は完成品1点を含む7点が出土している。

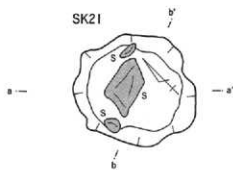
S K 45 S 14グリッドに位置する。長軸157cm、短軸110cmの不整形楕円形の平面形態を持つ。南端部は調査区外のため未検出である。覆土中に人頭大の礫を含む。西半部に礫が分布し、壁の立ち上がりは急である。東壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは46cmを測る。土器片2点が出土している。

S K 49 S 23・24グリッドに位置する。長軸89cm、短軸83cmの楕円形の平面形態を持つ。東壁の立ち上がりは急である。検出面からの深さは27cmを測る。土器片3点、剥片1点が出土している。

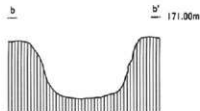
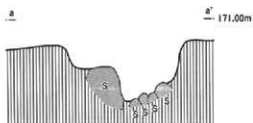
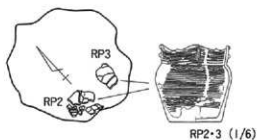


SK23

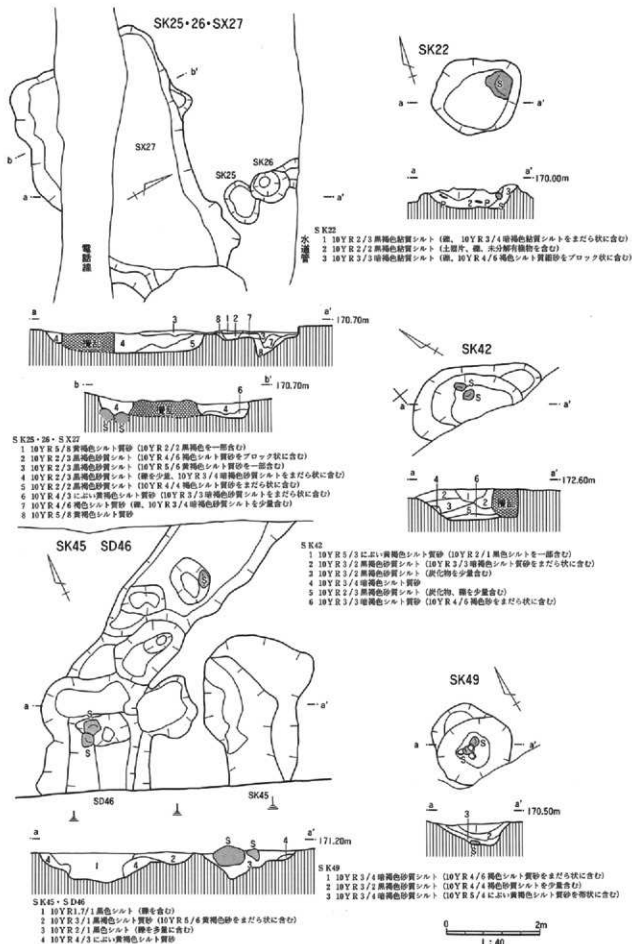
- 1 10Y R 2/2 黒褐色砂質シルト (炭化物, 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルトを一部含む)
- 2 10Y R 3/2 黒褐色砂質シルト (10Y R 4/4 褐色シルト質砂, 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルトを一部含む)
- 3 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト (10Y R 4/4 褐色シルト質砂を含む)
- 4 10Y R 2/3 黒褐色シルト (10Y R 4/4 褐色シルト質砂を含む)
- 5 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト (10Y R 5/6 黄褐色シルト質砂を一部含む)
- 6 10Y R 5/6 黄褐色シルト質砂



遺物出土状況



第7図 SK23墓壇・SK21土壇



第8図 SK25・26・SX27, SK22, SK42, SK45, SD46, SK49

## 4 溝跡 (第9図、図版9)

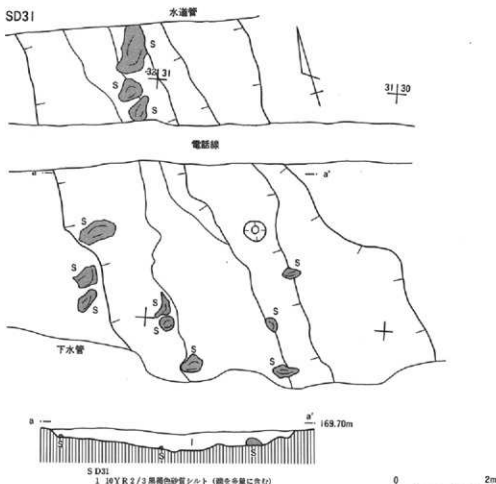
溝跡は、限られた調査範囲のため、集落内での位置関係や性格は明らかにできなかった。

**S D46** S14グリッドに位置する。北部を下水管によって破壊されており、南部は調査区外のため未検出である。北半部の底面は平坦で、壁の立ち上がりも緩やかであるが、南半部の底面は凹凸があり、礫が分布する。壁の立ち上がりも急である。検出面からの深さは、北半部で15cm、南半部で53cmを測る。土器片が43点、剣片が114点出土しているが、大半が北半部からの出土である。遺物の出土状況や、北側にそのつながりが確認されないことから、切り合った2基の長楕円形の土塼の可能性も考えられる。

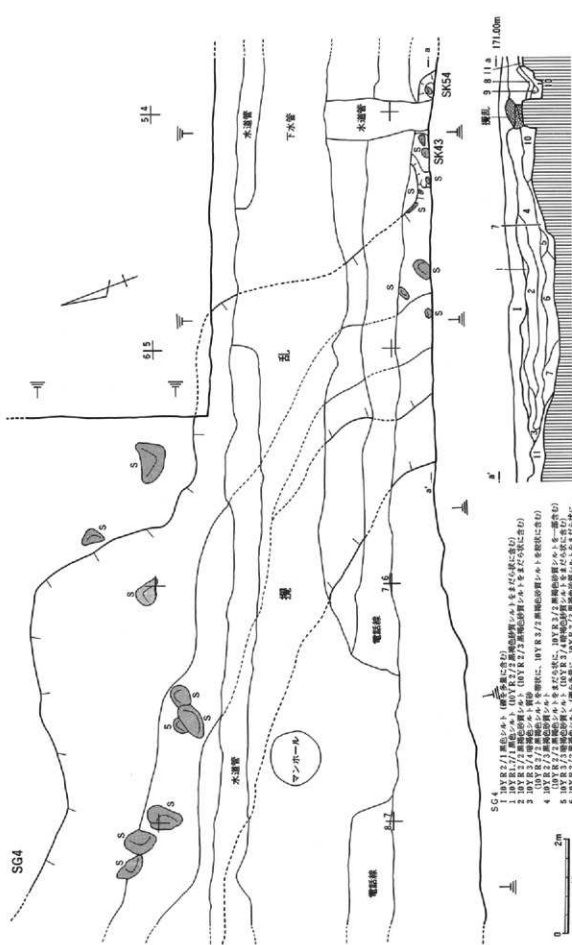
**S D31** N31・32グリッドからS30~32グリッドにかけて位置する。水道管、電話線、下水管によって一部が破壊されている。底面は凹凸があり、礫が多量に分布する。壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは59cmを測る。幅は4.7~6.7mを測る。遺物は出土していない。この溝がSG4の支流となるものか、人工のものかは不明である。

## 5 河川跡 (第3・10図)

**SG4** S5・6グリッドの南壁から16・17グリッドの北壁に向かって、蛇行しながら調査区を斜めに横切る。底部には礫が多量に分布する。この礫層を掘り込む遺構もあるため、この集落が存続していた時期に既に流水がなかったか、または断続的に水が流れていたものと思われる。覆土中からは多数の土器片、剣片が出土した。



第9図 S D31溝跡



第10図 SG-4 河川跡

- SG4
- 1 10Y R 2/1 黒色シロト (遺骨多数を含む)
  - 2 10Y R 17/1 黒色シロト (10Y R 2/2 黒褐色砂質シロトをまたがら成る)
  - 3 10Y R 3/1 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 4 10Y R 7/2 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 5 10Y R 2/2 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 6 10Y R 3/2 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 7 10Y R 3/3 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 8 10Y R 3/4 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 9 10Y R 3/5 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 10 10Y R 3/6 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)
  - 11 10Y R 4/2 黒褐色砂質シロト (遺骨少量を含む)

表 1 遺構観察表

## 竪穴住居跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形態	規模 (m)			出土遺物 (点)		備考
				長軸	短軸	深さ	土器	石器	
S T 1	S 16・17	N-19°-W	隅丸方形	(4.54)	3.84	0.25	98	103	水道管・下水管に切られる
S T 2	S 22	N-36°-W	隅丸方形	(3.44)	(3.34)	0.21		4	SK57・下水管に切られる
S T 3	S 23・24	N-39°-W	隅丸方形	4.10	2.98	0.19		5	下水管に切られる

## 土 壇

遺構番号	地区	平面形態	規模 (m)			出土遺物 (点)		備考
			長軸	短軸	深さ	土器	石器	
S K 21	N 13	円形	0.70	0.56	0.32	2	2	
S K 22	N 14	円形	0.98	0.88	0.18	18	7	
S K 23	N 21・22	楕円形	1.44	0.96	0.53	23	11	墓塚、SX27を切る
S K 25	N 22	円形	0.48	(0.34)	0.11	2	1	
S K 26	N 22	不整円形	0.42	0.36	0.26			
S X 27	N 22	不整形	(2.56)	1.66	0.25	5	9	SK23・電話線に切られる
S K 29	N 14	不整楕円形	0.70	0.34	0.09	1		
S K 30	N 23	円形	0.44	0.34	0.32	2		
S K 33	N 2	不整形	1.00	0.80	0.13	19	11	
S K 34	N 1・2	不整楕円形	1.36	0.94	0.12	3	1	
S K 35	N 18	円形	0.60	(0.40)	0.18		1	
S K 36	N 24	不整楕円形	1.09	0.78	0.24	1		
S K 37	N 22	不整楕円形	0.44	0.25	0.06	1		
S K 38	N 16	円形	0.28	0.32	0.16	3		
S K 39	N 23・24	円形	(0.48)	0.44	0.10	7	1	電話線に切られる
S P 40	N 15	円形	0.40	0.37	0.32	7	2	
S K 41	N 19	楕円形	(3.25)	2.20	0.26			水道管に切られる
S K 42	S 2・3	楕円形	1.46	(0.76)	0.36	2	7	電話線に切られる
S K 43	S 5	不明	(1.21)	(0.44)	0.19		1	水道管に切られる
S K 44	S 11	不整楕円形	0.68	0.44	0.24		1	
S K 45	S 14	不整楕円形	(1.57)	1.10	0.46	2		
S K 48	S 23	不整円形	0.77	(0.72)	0.30	1	1	下水管に切られる
S K 49	S 23・24	楕円形	(0.89)	0.83	0.27	3	1	下水管に切られる
S K 50	S 29・30	不整円形	0.97	0.70	0.26			
S K 51	S 16	不整形	1.16	(0.73)	0.27	2	5	
S X 52	S 12	不整形	1.10	0.62	0.27		1	
S K 53	S 9	不整形	0.83	0.46	0.20			
S K 54	S 4	不明	(0.61)	(0.32)	0.40			水道管に切られる
S K 55	S 10	円形	1.00	(0.44)	0.20	1		
S K 56	S 15	円形	0.83	0.82	0.34	10	3	
S K 57	S 22・23	不整形	2.34	1.70	0.46			S T 2を切る

## 溝 跡

遺構番号	地区	方向	規模 (m)			出土遺物 (点)		備考
			長さ	幅	深さ	土器	石器	
S D 31	N 31・32 S 30-32	N-10°-W	13.80	4.70~6.70	0.59			水道管・電話線・下水管に切られる
S D 46	S 14	N-47°-E	(3.06)	0.74~1.12	0.53	43	114	下水管に切られる

## IV 出土遺物

### 1 縄文土器 (第11~15図、図版10~17、表2・3)

第I群土器 口唇部にヘラ状工具による連続する刻目が加えられ、R Lの単節斜縄文か羽状縄文が施文される(1)。口縁部の肥厚した断面形が特徴的で、器面はザラザラとし焼成は良くない。胎土は石英と砂粒が多く混じり、繊維はあまり含まれない。

#### 第II群土器

1類 末端ループ文の類(13・48~54・64・65)で、多くは口縁部に横位に施文して文様帯を構成し、波状口縁を呈するものはその波頂部に貼付けによる隆帯を垂下させている。54は頸部が絞まり、体部に膨らみを持つ器形を呈する。地文には非結束羽状縄文(48・54)、斜縄文(49・50)、組紐縄文(51)などを施すものがある。13は平縁の口唇直下から4段のループ文がめぐり、その下に複節斜縄文、以下がR Lの粗い斜縄文となっている。

2類 変形ループ文の類(2・5・67・70・71)で、原体末端のループ文がくずれて不整燃糸文に近いものが見られる。5は原体に擦り戻しが加えられたと考えられる。70はL R原体のループ文を縦回転により施文しており、類例は少ない。

3類 羽状縄文が全面に施文される類(55~60)で、結束のあるものは見られない。施文は、2本の擦りの異なる原体を一段おきに横に回転させたものである。55は「く」の字状に外反する口縁部形態で、そこに施文される原体の長さは極めて短い。56は原体末端を輪にしてループ状に施文している。57はL RとR Lを同一の段内において交互に横回転施文し、菱形文様を形成する。60は口唇直下より横回転で複節の斜縄文が施され、次段ではL Rの単節斜縄文になり、13の体部文様に共通している。

4類 斜縄文を基調とする類(3・61~63)で、底面も多くは施文される(18・19)。61はR Lの縦回転文で、口唇の一部に内面に向けて棒状工具によるU字状の押圧が加えられる。62は横位回転でL R Lの複節斜縄文を施す。63は二股状の波状縁を呈すると考えられる。3には半截竹管による平行沈線が口縁部に沿って施文される。19は大形の深鉢底部で、底縁がやや外側に張り出す。18の底部文様は節・条とも短小なものが付される。

5類 組紐回転文の類(66・75)で、三つくりで施文される。

#### 第III群土器

1類 不整燃糸文の類(8・78・90)で、一部は口縁部文様帯にも付される。

2類 正整燃糸文が施文される類である。その種類として、網目状文(6・7・77・79・83・85・87・88)、羽状文(82)、斜行文(76・81・84)、2本1組の燃糸による木目状文(86・89)、多軸使用の葺瓦状文(91)などがある。器形には山形状や波状口縁を持ち頸部から強く外反するものが多く、波頂部に疣状貼付文を伴うものもある。

3類 全面にL R・R Lの斜縄文が粗く施文されている類(21・69・72・73)を扱う。21は完形の深鉢である。口縁部が直立する屈曲の少ない器形で、口縁は不規則な7単位の突起が巡る波状縁を呈する。底部は平底で縄文の施文はない。文様は口縁部からL Rの結節

斜縄文が全面に施され、綾絡文が8段にわたって見られる。体部下半部の6段目からは原体が0段多条に変わる。原体の長さは4cm前後で、内面には繊維擦痕が認められる。

4類 異条縄文の類(68・74)で、撻紐を軸にしてこれに別の撻紐を巻き付けた原体の回転による。74は地文としてRLの斜縄文が付される。

5類 半載竹管やへら状工具の施文具により、平行または波状沈線を描く類(17・25・29・32・38)である。これらの地文には斜縄文や羽状縄文の他、斜行・羽状の撻糸文が多く施される。17は沈線文と押引文が併用される深鉢形土器である。口縁は大小8単位の波状を呈し、波状部に隆帯貼付文と環状貼付文を交互に配している。口縁部文様帯の上段には、口縁平行に3本1組の櫛歯状工具で押引文を施し、さらにその外側を平行沈線で囲むことから5条一連の文様帯を成している。また下位には5本1組の櫛歯状工具によるコンパス文が施される。下段では頸部まで平行沈線文が横走している。以下押引文とコンパス文を交互に繰返し、体部上半から地文として非結束羽状縄文が施文されている。

6類 前類の施文具等を利用して刺突文・押引文が施される類(34・36・37・80)で、地文には斜縄文と網目・木目状撻糸文などがある。37は半載竹管先端による直角的な刺突が連続して行われる。80は半載竹管による連弧状文が2段、口縁部文様帯として付され地文に逆S字状の撻糸文が施文される。また口縁部内側には1条の沈線が横走している。

第IV群土器 S字状連鎖撻糸文を施文している土器(92・93)である。体部破片で器形については不明である。93の胎土には繊維が若干混入される。

#### 第V群土器

1類 刻目付き粘土紐貼付文の類(9～12)で、いずれも平縁・平底の深鉢形土器で、大形のものには胴張りの器形を呈する。地文には単節斜縄文が施されるが、明瞭な帯状をなすものは見られない。粘土紐は縄文施文後、横位に口縁部を一周して2列貼付けられ、粘土紐上部は無文帯となる。10では頸部にも円文状の貼付痕が記される。

2類 竹管円文が付される類(16・43)で、16は半載竹管内側を使用した波状沈線文が併用され、地文にRL斜縄文が施される。43は5mm径の細い竹管が使われている。

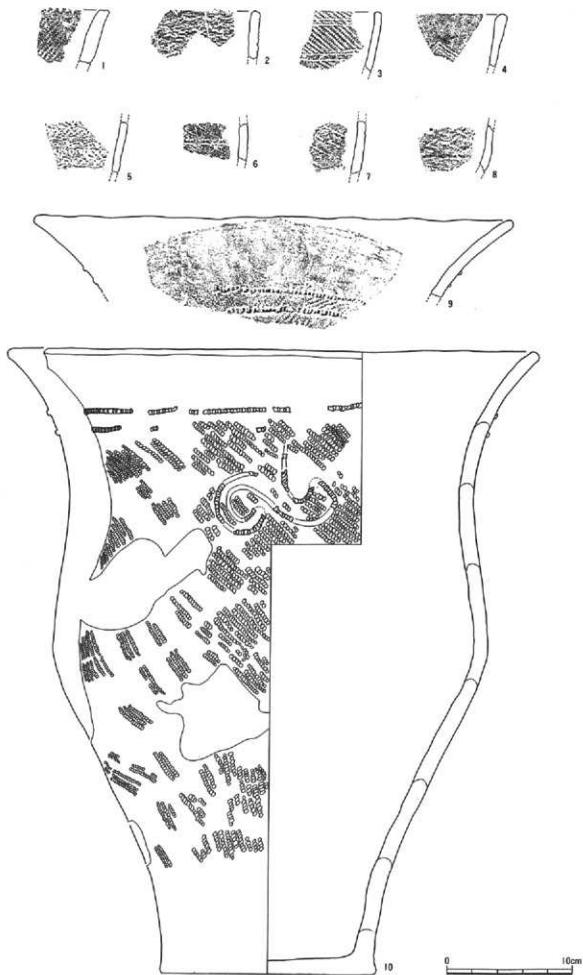
3類 先の平らな櫛歯状工具による文様が全面に施文されている類(14)で、4単位の波状口縁間に小さな山形状突起を持つ小形土器である。器形は頸部で絞り込まれ、口縁部がほぼ直上する。波頂部には隆帯と疣状のものが交互に貼付けられる。文様には浅い平行沈線文・コンパス文・押引文が見られ、施文の特徴が貝殻条痕に類似している。

4類 爪形文のあるもの(26)。口縁平行で横位に連続施文され、波状のコンパス文と口縁部文様帯を構成している。

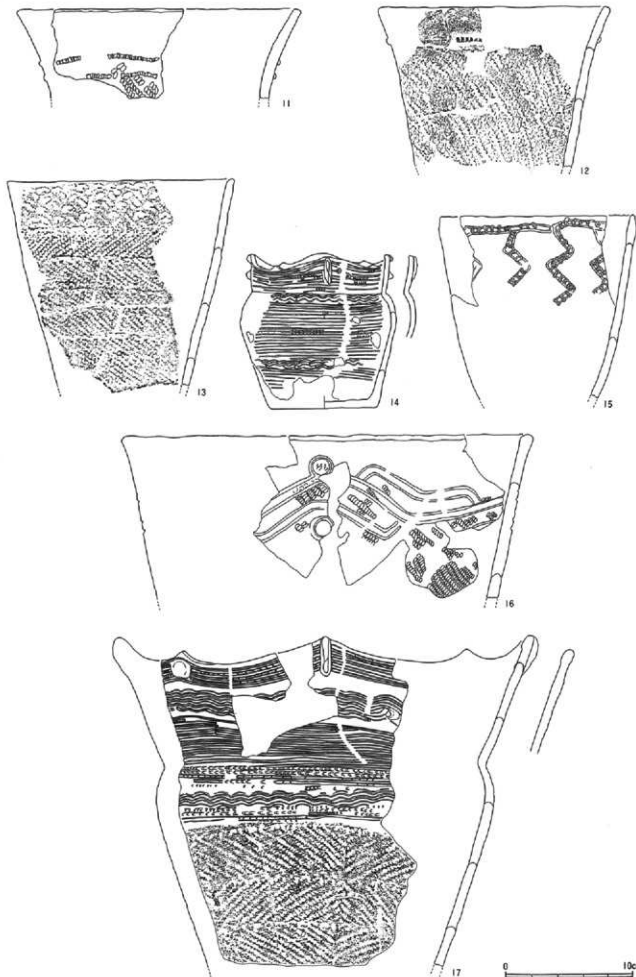
5類 各種の沈線文が施されるもので、さらに細分できる。半載竹管の内側を使用したもの(4・28・44)で、鋸歯状・波状・平行文などの施文がある。工具の先端または外側を利用したもの(27・30・31・40)では、平行・波状・斜格子・コンパス文等が施される。

6類 刺突文を施すもの(20・35・39・45)。20は底部を含む体部下半の断片であるが、全面に先の尖った串歯状工具による横位の連続刺突を行う。45は沈線で区画された口縁部

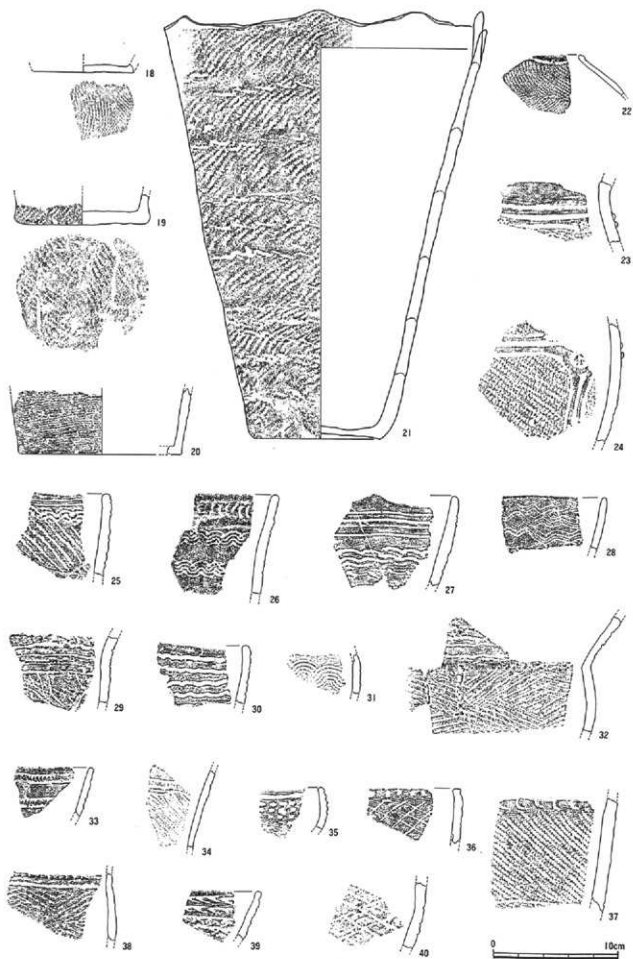




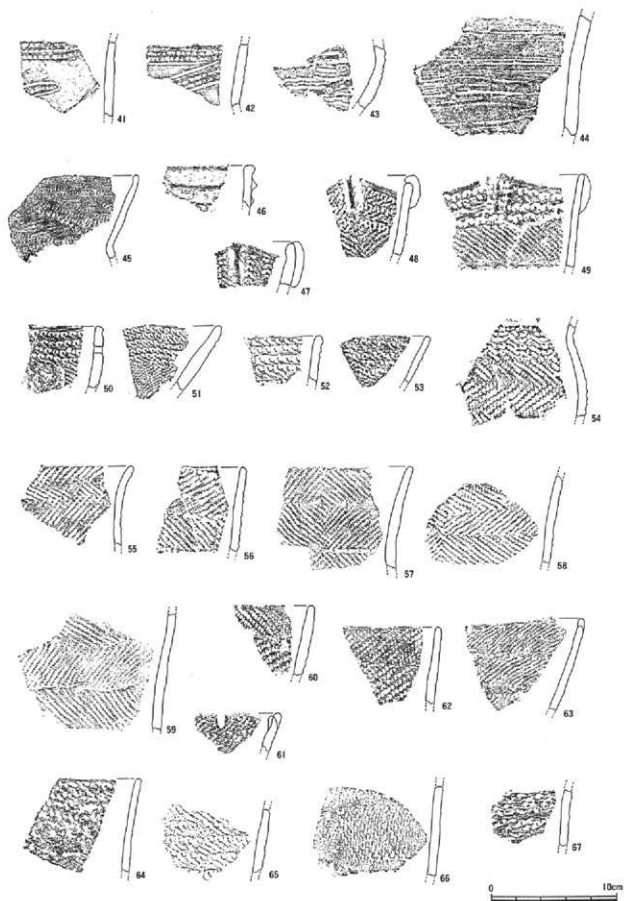
第11図 縄文土器(1)



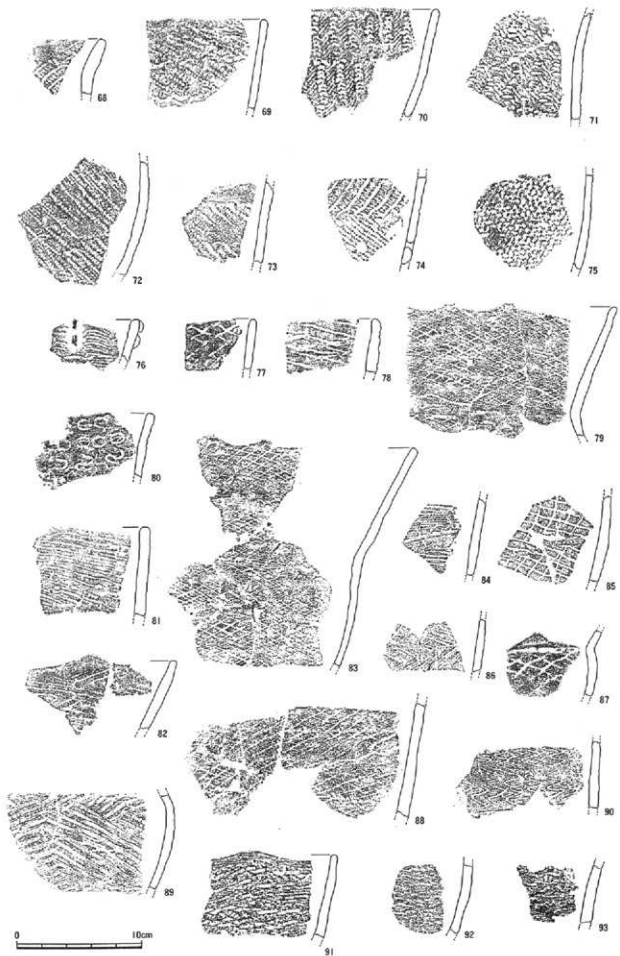
第12圖 網文土器(2)



第13図 縄文土器 (3)



第14図 縄文土器(4)



第15図 縄文土器 (5)

表2 縄文土器観察表(1)

No.	出土層・層位	器形・分類	内外面の文様他	備考
1	ST 1	深鉢・I	口唇部:刻目文、RL単節斜縄文(縦)	
2	ST 1	深鉢・II2	口縁部:変形ループ文	
3	ST 1	深鉢・II4	口縁部:RL単節斜縄文+半載竹管平行沈線文、内面:へら磨き	
4	ST 1	深鉢・V5	口縁部:半載竹管鋸歯状沈線文、内面:へら磨き	
5	ST 1	深鉢・II2	口縁部下半:変形ループ文(摺り戻し)、内面:へら磨き	
6	ST 1	深鉢・III2	胴部:網目状摺糸文	
7	ST 1	深鉢・III2	胴部:網目状摺糸文	
8	ST 1	深鉢・III1	胴部:不整摺糸文、内面:へら磨き	
9	ST 1	深鉢・V1	口縁部:刻目付き粘土紐貼付文+LR・RL斜縄文、内面:へら磨き	
10	ST 1	深鉢・V1	口縁部:刻目付き粘土紐貼付文、胴部~胴部:RL斜縄文、内面:へら磨き	RP6・7
11	N16-III	深鉢・V1	口縁部:刻目付き粘土紐貼付文+RL斜縄文、内面:へら磨き	
12	N 6-III	深鉢・V1	口縁部:刻目付き粘土紐貼付文、胴部RL斜縄文、内面:へら磨き	
13	S24-III	深鉢・II1	口縁部:ループ文(4段)、胴部:LRL複節斜縄文+非結束羽状縄文	
14	SK21	深鉢・V3	波状口縁:隆帯+疣状貼付文、口縁部~胴部:櫛目状沈線文+コンパス文	RP2・3、補修孔
15	ST 1	深鉢・V7	口縁部~体部上半:半載竹管鋸歯状押引文、その他無文でへら削り痕	
16	N 6-III	深鉢・V2	口縁部:竹管円文+半載竹管波状沈線文、胴部地文:RL斜縄文	
17	SK23	深鉢・III5	波状口縁:隆帯+疣状貼付文、胴部上半:平行沈線文+コンパス文、下半:羽状縄文	RP4、補修孔
18	N19-III	深鉢・II4	底部:0段多糸RL単節斜縄文	
19	S24-III	深鉢・II4	胴部下~底部:LR単節斜縄文	
20	N22-III	深鉢・V6	胴部下半:連続半歯状刺突文	
21	SK23	深鉢・III3	波状縁(7単位)、口縁部~胴部:LR結節斜縄文(縦織文)、内面:繊維擦痕	RP1
22	N10-III	深鉢・VI2	口縁部~胴部:羽状縄文	
23	N7-III	深鉢・VII1	胴部:隆起線文+沈線文、R複節斜縄文、内面:へら磨き	
24	N17-III	深鉢・VII1	口縁部下半~胴部:隆起線文+沈線文、内面:へら磨き	23・24同一個体
25	S17-III	深鉢・III5	口縁部:半載竹管平行・波状沈線文+斜行摺糸文、内面:へら磨き	
26	N14-III	深鉢・V4	口縁部:爪形刺突文+コンパス文	
27	S23-III	深鉢・V5	波状縁、口縁部:平行沈線文+コンパス文、内面:へら磨き	
28	S24-III	深鉢・V5	口縁部:半載竹管波状沈線文、内面:へら磨き	
29	S26-III	深鉢・III5	頸部:平行沈線文+斜行摺糸文、内面:へら磨き	
30	S17-III	深鉢・V5	口縁部:波状沈線文、内面:へら磨き	
31	N16-III	深鉢・V5	胴部:刻目文+コンパス文、内面:へら磨き	
32	N12-III	深鉢・III5	頸部:波状沈線文、胴部:羽状摺糸文、内面:へらなで+へら磨き	
33	N14-III	深鉢・V7	口縁部:半載竹管押引文、内面:へら磨き	
34	N14-III	深鉢・III6	胴部上半:半載竹管押引文+木目状摺糸文、内面:へら磨き	
35	N 2-III	深鉢・V6	口縁部:櫛歯状連続刺突文、内面:へら磨き	
36	S26-III	深鉢・III6	口縁部:角状刺突文+網目状摺糸文、内面:口縁部に刺突文・へら磨き	
37	N18-III	深鉢・III6	胴部上半:半載竹管爪形刺突文+RL斜縄文+平行沈線文、内面:へら磨き	
38	N23-III	深鉢・III5	口縁部:へら状沈線文+羽状摺糸文、内面:へら磨き	
39	N19-III	深鉢・V6	口縁部:櫛歯状鋭角連続刺突文、内面:へら磨き	
40	N11-III	深鉢・V5	胴部:斜格子状沈線文	
41	N19-III	深鉢・V7	頸部~胴部:区画沈線内押引文、内面:へら磨き	41・42同一個体
42	N 6-III	深鉢・V7	頸部~胴部:区画沈線内押引文、内面:へら磨き	
43	N 2-III	深鉢・V2	胴部:竹管円文(刺突)+波状沈線文、内面:へら磨き	
44	S29-III	深鉢・V5	胴部:平行沈線文	
45	N19-III	深鉢・V6	口縁部:区画沈線内連続刺突文、内面:へら磨き	
46	N26-III	深鉢	口縁部:隆起線貼付文、内面:へら磨き	

表3 縄文土器観察表(2)

No.	出土遺跡・層位	器形・分類	内外面の文様他	備考
47	S25-III	深鉢・II1	波状線・隆帯貼付文、口縁部:RLループ文(縦)、内面:へら磨き	
48	N19-III	深鉢・II1	波状線・隆帯貼付文、口縁部:RLループ文+羽状縄文、内面:へら磨き	
49	S22-III	深鉢・II1	波状線・隆帯貼付文、口縁部:ループ文+RL斜縄文	
50	N6-III	深鉢・II1	口縁部:RLループ文+RL斜縄文?、内面:へら磨き	補修孔
51	N17-III	深鉢・II1	口縁部:RLループ文+組紐文、内面:へら磨き	
52	N31-III	深鉢・II1	口縁部:RLループ文	
53	N17-III	深鉢・II1	口縁部:RLループ文、内面:へら磨き	
54	N21-III	深鉢・II1	頸部:RLループ文(縦)、胴部:複節羽状縄文、内面:へら磨き	
55	N31-III	深鉢・II3	口縁部:非結束羽状縄文	
56	S22-III	深鉢・II3	口縁部:非結束羽状縄文(結節)、内面:へら磨き	
57	N20-III	深鉢・II3	口縁部:非結束羽状縄文(菱形状)、内面:へら磨き	
58	N6-III	深鉢・II3	胴部:非結束羽状縄文、内面:へら磨き	
59	N16-III	深鉢・II3	胴部:非結束羽状縄文(0段多糸)、内面:へら磨き	
60	S20-III	深鉢・II3	口縁部:非結束羽状縄文、内面:へら磨き	
61	N19-III	深鉢・II4	口縁部:LR単節斜縄文・棒状工具押圧痕	
62	N18-III	深鉢・II4	口縁部:LR複節斜縄文、内面:へら磨き	
63	N19-III	深鉢・II4	波状線・口縁部:LR単節斜縄文、内面:へら磨き	
64	S21-III	深鉢・II1	口縁部:RLループ文、内面:へら磨き	
65	N31-III	深鉢・II1	口縁下部:RLループ文、内面:へら磨き	
66	N18-III	深鉢・II5	胴部:組紐回転文(三つくり)、内面:へら磨き	
67	N19-III	深鉢・II2	口縁下部:変形ループ文、内面:へら磨き	
68	N11-III	深鉢・III4	口縁部:L異条縄文	
69	N19-III	深鉢・III3	口縁部:RL単節斜縄文	
70	N19-III	深鉢・II2	口縁部:LR変形ループ文(縦)	
71	S25-III	深鉢・II2	口縁部:LR変形ループ文、内面:へら磨き	
72	N2-III	深鉢・III3	胴部:RL単節斜縄文、内面:へら磨き	
73	N17-III	深鉢・III3	胴部:RL単節斜縄文、内面:へら磨き	
74	N14-III	深鉢・III4	口縁下部:L異条縄文+RL単節斜縄文、内面:へら磨き	補修孔
75	N18-III	深鉢・II5	胴部:組紐回転文(三つくり)、内面:へら磨き	
76	S3-III	深鉢・III2	波状線・疣状貼付文、口縁部:斜行撚糸文、内面:へら磨き	
77	N24-III	深鉢・III2	口縁部:網目撚糸文、内面:へら磨き	
78	N24-III	深鉢・III1	口縁部:不整撚糸文	
79	S26-III	深鉢・III2	波状線・口縁部:網目撚糸文、内面:へら磨き	
80	N2-III	深鉢・III6	口縁部:半截竹管連弧状文(2段)+不整撚糸文、内面:へら磨き	
81	N26-III	深鉢・III2	波状線、口縁部:斜行撚糸文、内面:へら磨き	
82	S23-III	深鉢・III2	波状線、口縁部:羽状撚糸文、内面:へら磨き+口縁沈線	
83	S26-III	深鉢・III2	波状線、口縁部~胴部:網目撚糸文、内面:へら磨き	
84	N23-III	深鉢・III2	胴部:斜行撚糸文、内面:へら磨き	
85	S25-III	深鉢・III2	胴部:網目撚糸文	
86	N24-III	深鉢・III2	胴部:木目撚糸文、内面:へら磨き	
87	N20-III	深鉢・III2	頸部~胴部:網目撚糸文、内面:へら磨き	
88	SK23	深鉢・III2	胴部:網目撚糸文、内面:へら磨き	
89	S25-III	深鉢・III2	胴部:木目撚糸文、内面:へら磨き	
90	S25-III	深鉢・III1	胴部:不整撚糸文、内面:へら磨き	
91	SD47	深鉢・III2	波状線、口縁部:葦瓦状撚糸文、内面:へら磨き	
92	SK32	深鉢・IV	胴部:S字状連鎖撚糸文	
93	SK32	深鉢・IV	胴部:S字状連鎖撚糸文、内面:へら磨き	

文様帯に2点1組の連続刺突を3列ずつ付している。

7類 押引文を施すもの(15・33・41・42)である。15は半截竹管内側による口縁一周の施文後、縦位鋸歯状に文様構成される。器面はその他無文で、胴部にはヘラ削りの痕跡が明瞭に残る。41・42は同一個体である。沈線で区画された文様帯内に先の角ばったヘラ状工具による施文が繰返される。

第VI群土器 縄文時代前期以降の土器を一括する。

1類 縄文中期の隆起線文や沈線文の土器(23・24)で、大木8b式に属する。

2類 縄文後期～晩期の器厚の薄い壺形土器破片(22)が1点出土している。

2 石器(第16～19図、図版18・19、表4)

A：石鎌は12点の出土がある。これらを基部の形態的な差異により、I類：基部が平基になる(1)、II類：浅いわずかな抉り込みが入る(2～4)、III類：基部に半円形の抉り込みが入る(5～12)ものに大別できる。側縁の形態はすべて左右対称形になる。

B：両面加工により尖った先端部を作出した石器を尖頭器(13～15)とした。13は平面形が三角形になる平基(I類)、14は円基(II類)の尖頭器である。15は基部側が欠損している。

C：剥片の縁辺調整加工を施して、その一端に尖った先端部を作出した石器を石錐とした。特徴は全体的に厚味となり、先端部に摩耗が認められることである。石鎌に類似する長い尖頭部を持つI類(16)と、基部側も入念に加工し棒状の形態をとるII類(17・18)に分類される。17は尖頭部と基部との境界が不明瞭である。

D：相対する二つのノッチを入れることによって、つまみを作出している石器を石匙(19～44)とした。これらは形態の把握が不可能な折損品や未成品を除き、つまみと刃部の位置関係によって以下のように分類される。I類：側縁が刃部となる縦形のもので、左右が対称形となるもののうち、尖頭器のような先端部を持つa(22・25・26・28・39・41)と、先端部が幅広となり加工があって刃部となるb(34・38)に細分する。また左右が非対称のものうち、右側縁が直線状をなし左側縁が弧を描くc(29・42)、左側縁が直線状をなし右側縁が弧を描くd(27・30・31・33)、右側縁が直線状で左側縁が「く」の字状に曲がるe(32)、左側縁が弧を描き右側縁が「く」の字状に曲がるf(37)に細分できる。II類：つまみを上方にしてその下端の縁辺が刃部となる横長のもの(43)で、末端の刃部は弧を描く。III類：I・II類の中間的形態となるもの(35)で、末端部が直線状をなす。

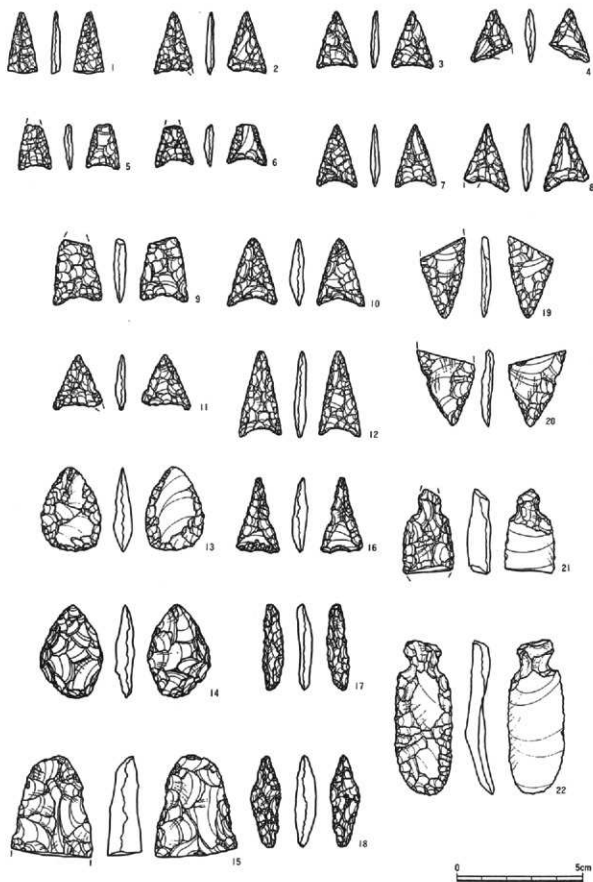
E：剥片の背面と主要剥離面の両面に加工され、長軸の末端が刃部となる石器を石筥(45～47)とした。いずれも刃部が片刃状のものである。47にはアスファルトが付着する。

F：急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を掘器(48・49)とした。素材の縁辺を除く三縁辺が刃部となり得るものである。

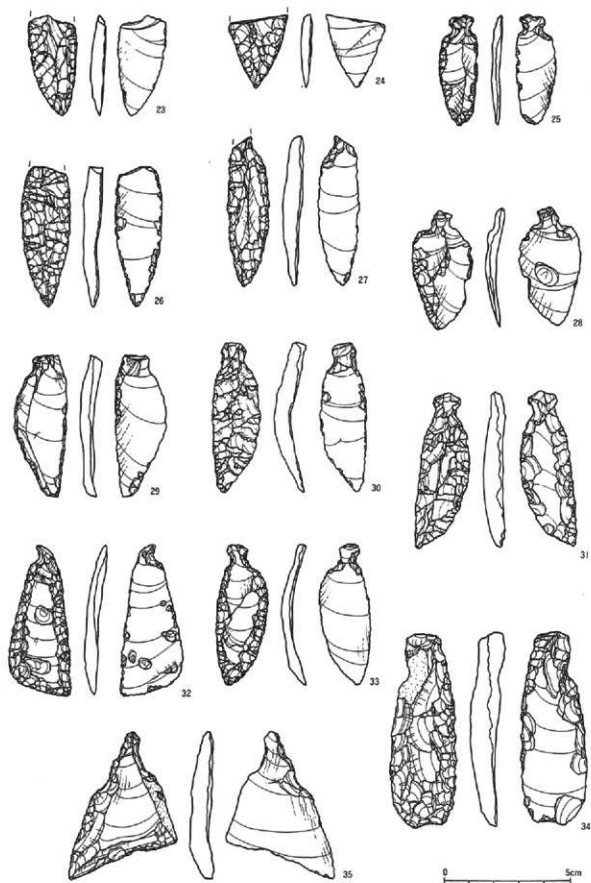
G：剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器を削器(50)とした。縦長剥片が素材として用いられ、背面側の両側縁に加工が施され、末端が収斂する。

H：51は刃部が素材の剥離面で構成されるトランシェ様石器として分類したが、丸味を帯びる刃部には若干の加工が認められる。

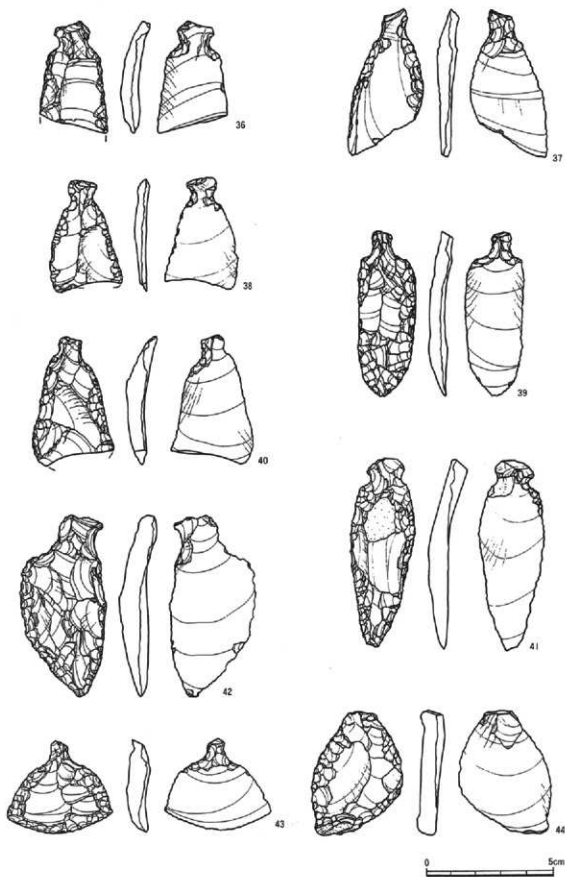




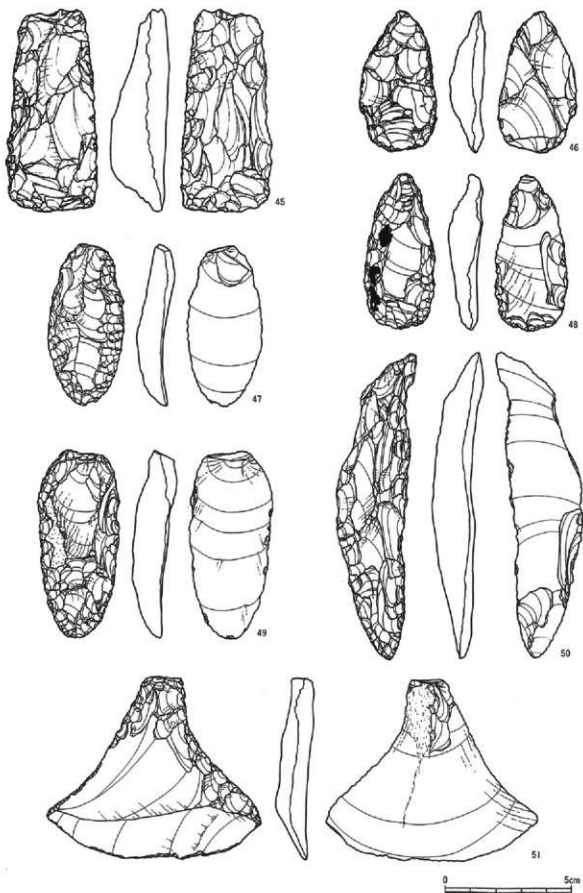
第16圖 石器(1)



第17圖 石器(2)



第18図 石器(3)



第19圖 石器(4)

表4 石器観察表

No.	器種	出土遺構・層位	法量 (cm)			重さ (g)	調整		材質	分類
			長さ	幅	厚さ		正面	背面		
1	石 鏃	N2-III	2.4	1.1	0.3	0.7	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A I
2	石 鏃	S5-III	(2.3)	1.4	0.3	0.8	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A II
3	石 鏃	N22-III	2.2	1.5	0.2	0.8	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A II
4	石 鏃	ST 1	(2.0)	1.5	0.4	1.0	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	A II
5	石 鏃	S23-III	(1.7)	1.3	0.3	0.6	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
6	石 鏃	N6-III	(1.6)	1.5	0.3	0.7	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	A III
7	石 鏃	ST 1	2.4	1.6	0.3	0.9	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
8	石 鏃	N22-III	(2.5)	1.8	0.3	1.1	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
9	石 鏃	SX27	(2.5)	1.8	0.4	2.0	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
10	石 鏃	ST 1	2.6	1.8	0.5	1.6	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
11	石 鏃	N2-III	(2.2)	1.8	0.3	1.0	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
12	石 鏃	N2-III	3.5	1.6	0.4	1.7	全体調整	全体調整	珪質頁岩	A III
13	尖頭器	S23-III	3.3	2.4	0.7	5.0	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	B I
14	尖頭器	S11-III	3.7	2.4	0.6	5.3	全体調整	全体調整	珪質頁岩	B II
15	尖頭器	N14-III	(4.1)	3.2	1.3	14.6	全体調整	全体調整	珪質頁岩	B II
16	石 錐	N19-III	2.9	1.6	0.5	1.7	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	C I
17	石 錐	S20-III	3.3	0.8	0.5	1.4	全体調整	全体調整	珪質頁岩	C II
18	石 錐	N23-III	3.5	1.2	0.8	2.8	全体調整	全体調整	珪質頁岩	C II
19	石 匙	S24-III	(3.2)	1.9	0.4	1.8	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	D
20	石 匙	N23-III	(3.0)	2.3	0.4	2.2	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	D
21	石 匙	N23-III	(3.2)	2.0	0.9	6.0	全体調整	基部調整	珪質頁岩	D
22	石 匙	SK35	6.1	2.2	0.7	10.6	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I a
23	石 匙	ST 1	(3.9)	1.9	0.5	3.8	全体調整	無調整	珪質頁岩	D
24	石 匙	N14-III	(2.7)	2.3	0.4	2.4	全体調整	無調整	珪質頁岩	D
25	石 匙	N2-III	4.4	1.6	0.3	2.1	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	D I a
26	石 匙	N2-III	(5.5)	1.9	0.7	7.2	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	D I a
27	石 匙	N19-III	(5.9)	1.7	0.8	6.7	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I d
28	石 匙	X-O	4.7	2.4	0.4	3.8	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I a
29	石 匙	N19-III	5.6	2.1	0.7	6.4	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I c
30	石 匙	SK32	5.9	1.9	0.7	6.9	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	D I d
31	石 匙	S20-III	6.2	2.0	0.8	9.9	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	D I d
32	石 匙	N18-III	6.0	2.5	0.6	7.7	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I e
33	石 匙	SK42	5.5	1.9	0.4	4.9	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I d
34	石 匙	N13-III	7.6	2.6	1.1	22.8	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I b
35	石 匙	N19-III	6.1	4.6	0.8	13.1	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D III
36	石 匙	N26-III	(4.4)	2.9	0.7	7.7	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D
37	石 匙	S24-III	6.2	2.8	0.7	9.4	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I f
38	石 匙	SK21	(4.3)	2.8	0.4	4.6	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I b
39	石 匙	S14-III	6.5	2.3	0.6	10.5	全体調整	基部調整	珪質頁岩	D I a
40	石 匙	N23-III	(5.2)	3.2	0.7	9.5	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D
41	石 匙	S14-III	7.4	2.5	0.8	13.8	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D I a
42	石 匙	N7-III	7.1	3.4	1.0	23.9	全体調整	基部調整	珪質頁岩	D I c
43	石 匙	N6-III	3.6	4.2	0.7	8.1	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D II
44	石 匙	ST 1	5.2	3.5	0.8	14.8	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	D
45	石 篋	S23-III	7.9	3.6	2.1	61.6	全体調整	全体調整	珪質頁岩	E I
46	石 篋	N2-III	5.5	3.1	1.3	18.0	縁辺部調整	数回調整	珪質頁岩	E II
47	石 篋	N18-III	6.1	2.8	1.2	20.5	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	E II
48	搔 器	N10-III	6.4	2.9	1.0	22.3	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	F
49	搔 器	N7-III	7.3	3.3	1.3	34.8	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	F
50	削 器	SK23	12.4	2.9	1.7	49.8	全体調整	無調整	珪質頁岩	G
51	トランシェ 石 器	S10-III	7.1	8.5	1.1	47.2	縁辺部調整	基部調整	珪質頁岩	H

## V まとめと考察

上荒谷遺跡はその存在が古くから知られており、すでに2度にわたる発掘調査が行われている。今回の調査は、主要地方道天童寒河江線地方特定道路整備事業（荒谷工区）に伴う緊急発掘調査である。調査面積は、遺跡面積37,500㎡のうち事業実施区域を対象にした1,700㎡であり、遺跡全体のごく一部が明らかにされたに過ぎないが、今回の調査で得られた資料をもとに若干の考察を加え、以下にまとめる。

### 1 遺構について

検出された遺構は、竪穴住居跡3棟、墓塚1基、土壌約50基、溝跡2条、河川跡1条、その他ピット約30基である。これらの遺構は第Ⅱ層中からの掘り込みが確認されたが、遺構検出面となったのは第Ⅴ層上面である。礫が堆積している調査区両端と河川跡以外は地山の黄褐色砂層が安定して堆積しており、この地域から遺構が集中して検出された。しかし河川跡の礫層を掘り込む遺構もあるなど、旧河川の機能時期と集落の構成時期がどのように関わってくるのか、検出状況等からは把握できなかった。また、地形的に今回の調査区は立谷川第3河岸段丘の西縁辺部にあたり、旧河川と住居跡等の位置関係や遺物の散布状況等から考え、集落の範囲は段丘縁辺に沿って南北方向に広がる 것이予想される。

出土した土器から、調査区周辺において集落が存続したのは大木1～3式並行期までの時期と考えられる。なかでも大木2a式期の出土量および土器包含遺構が最も多く、この時期には調査区一帯が中心地であったものと思われる。他に縄文中期以降の土器も包含層より出土しており、調査区外もしくは近辺に当該期の遺跡が存在する可能性もある。

3棟の竪穴住居跡は、水道管等の埋設施設によって破壊される部分があり、そのプランおよび規模を全体検出できたものはなかったが、一辺4m弱を測る隅丸方形の形態を呈する。ST1からは大木3式並行期の土器がほぼ床面に近い覆土中から出土しており、遺構の廃棄が集落の廃絶時期に重なるため、これらに関連して注目される。ST2・3は遺物が出土していないため時期については不明であるが、主軸方向がST1と近い値を示していることや、位置関係から同時期に営まれていた可能性が高い。

SK23は倒れた深鉢の出土状況から推測し墓塚と判断したが、覆土および深鉢内土壌の理化学分析の結果により断定される。深鉢内だけでなく土壌覆土にも遺体埋納の可能性が指摘できたこと、深鉢底部の破片が覆土中から出土したこと等は、遺体の埋葬方法や埋葬のどの時点で底部を打ち欠いたかなど、構築方法や墓制を探る上で貴重な資料になる。

### 2 遺物について

今回の調査によって出土した遺物は整理箱にして10箱であり、その内訳は縄文土器が8箱、石器及び剥片が2箱である。

出土した縄文土器は、大部分が小破片で全体の器形が分かるものは少なく、遺存状態が良くないものは施文された文様が不明なものも多い。遺構内から比較的まとまった資料が得られたのは、ST1住居跡とSK23墓塚に限られた。また、包含層では層位的な分層調

査が行えなかった。したがって、本稿で扱った土器の分類は文様の特徴に主体をおいて、これまでの研究成果による編年型式に当てはめたものである。これらの土器群は、ごく少数の縄文中期以降の土器片を除いては、ほとんどの土器が胎土に繊維を混入することを含め概ね縄文前期前半に比定され、大木1式～3式に並行する。

I群とした土器は1点だけの出土であり、小破片のため器形の把握等は困難であるが、口唇上端に刻目が付けられ肥厚した口縁部形態に特徴を持つ。この内容は、大木1式に先行する上川名Ⅱ式もしくは桂島式の範疇で捉えられるもので、縄文前期初頭の土器である。Ⅱ群土器は、ループ文・羽状縄文・斜縄文・組紐文などのいわゆる回転縄文だけが地文に用いられ、一見して胎土に繊維を多量に含むものである。中でもループ文と羽状縄文の多用が目立つ。ループ文は口縁部に末端が重層して数段横位に回転され、口縁部文様帯的な効果をあげている。羽状縄文では非結束羽状縄文が主体を占めるが、原体が多様で燃りの異なる原体を同じ段に交互にあるいは一段おきに帯状に施すもので、菱形状の文様にするなど装飾的な意図さえ窺える。器種は平縁もしくは波状口縁を呈する深鉢形土器であり、口縁部に貼付けを行うものがある。底部は平底で縄文施文のものや底縁が外側に張り出すものが見られる。このような土器は大木1式とされている。続くⅢ群土器は、器面に絡糸体の回転による各種の燃糸文が施されるもの、半截竹管・棒状工具等による沈線や連弧文などを伴うものである。沈線文としては平行文や波状文の他、櫛目状文・コンパス文・押し文などがある。地文としては燃糸文の他、斜縄文や異条縄文が用いられる。中でも体部全面に網目状燃糸が施されたものが多い。器形は口縁部が直上するかやや内弯し、平縁もしくは波状縁を呈する深鉢形であり、口縁部の波状部分に隆帯貼付文などを配したものもある。胎土への繊維の混入は少なくなる。このような土器は、大木2a式に比定される。Ⅳ群土器は小破片で出土量も少ないが、特徴的なS字状連鎖燃糸文が多用される。大木2b式に属するものであり、回転縄文や前群を飾った多様な沈線文等が減少し文様が単純化する傾向が指摘できる。続くⅤ群土器では、口縁部文様帯に粘土紐貼付文や竹管円文を施すもの、および破片資料で竹管状施文具使用のみのものを一括して扱った。この中には胎土に繊維を多く含むものもある。爪形文や竹管円文、それに刻目が付された紐状貼付文などの施文を特徴とし、その内容は関東東部の諸磯a式に類似するものである。本群は1類～4類までを大木3式に比定させ、破片資料で沈線・刺突・押し文だけの施文となる5類以降の土器については大木2a～3式の範疇で捉えることとする。

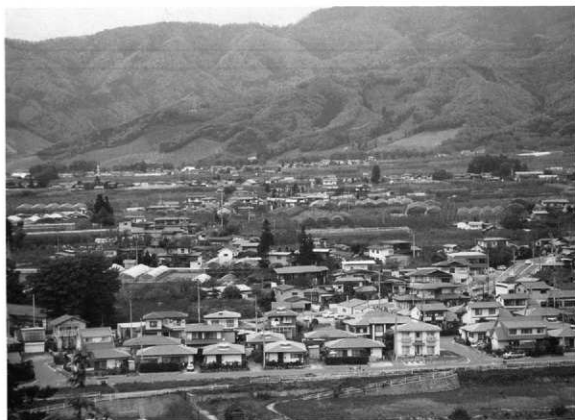
今回発掘された石器は、土器の分析から大部分が縄文時代前期前半に属するものである。石器の大半が割片ないし破片で、採録したのはすべて打製石器であり、そのすべてが頁岩製である。これらについては先に8器種13類に分類したが、全体として石鏃と石匙が多いのが特徴である。石核も1点出土しているが、直径10～20cmの原石を打ち欠いて縦長割片を作り、これを加工して石器を作り上げたと考えられる。狩猟活動が活発に行われたと同時に、植物質食料の採集・加工も活発に行われていた。これは上荒谷遺跡が集落跡であり、遺跡内で生活がある程度完結していたからであろうと推察される。

## 報告書抄録

ふりがな	かみあらいせきはつちつちようさほうこくしょ							
書名	上荒谷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編集者名	須賀井新人・高桑 登							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒990-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301							
発行月日	西暦1996年3月31日							
よりがな 所取遺跡名	よりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみあらか 上荒谷	やまがたけんてんどう 山形県天童 しやまがたあらか 市大字荒谷 あびらあらか 字上荒谷	6210	232	38度 18分 49秒	140度 24分 04秒	19950508～ 19950630	1,700	主要地方道 天童寒河江 線地方特定 道路整備事 業（荒谷工 区）
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上荒谷	集落跡	縄文前期	竪穴住居跡 墓 塚 土 塚 溝状遺構 旧河川跡 ピット	3棟 1基 50基 2条 1条 30基	縄文土器 深鉢 石鏃 尖頭器 石錐 石匙 石筥 掘器 削器 凹石	竪穴住居跡付近の土塚 から底部を壊した完形 の深鉢が倒位で出土し、 墓塚と思われる。		



版 圖



遺跡遺景 (南から)



調査前状況 (東から)



鉄入れ式 (北東から)



重機導入 (東から)



グリッド杭打ち作業 (南西から)



面整理作業 (南西から)



遺構精査 (西から)



遺構精査 (東から)



記録作業 (南東から)



現地説明会 (南東から)



遺跡層序 (南西から)



北側調査区遺構検出状況 (東から)



北側調査区完掘状況 (東から)



南側調査区東半部遺構検出状況（西から）



南側調査区東半部完掘状況（西から）



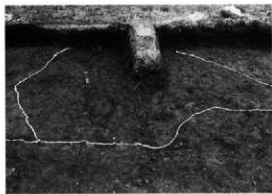
南側調査区西半部遺構検出状況（東から）



南側調査区西半部完掘状況（東から）



ST1遺物出土状況（北から）



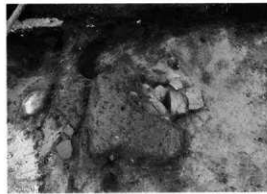
ST1検出状況（北から）



ST1完掘状況（北から）



RP6出土状況（北から）



RP7出土状況（西から）



ST2土層断面 (北から)



ST2完掘状況 (北から)



ST3土層断面図（北から）



ST3完掘状況（北から）





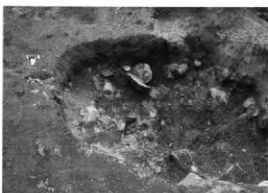
SK23遺物出土状況 (西から)



SK23土層断面 (西から)



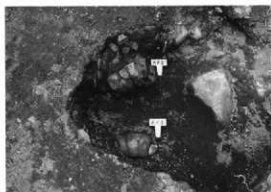
RP4出土状況 (南から)



RQ5出土状況 (北から)



SK23穴掘状況 (北から)



SK21 RP2・3出土状況 (東から)



SK25・26、SX27土層断面 (西から)



SK22土層断面 (北から)



SK21・22完掘状況 (北から)



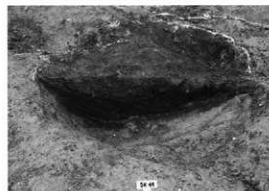
SK45、SD46土層断面 (南から)



SK42完掘状況 (南から)



SD31土層断面 (南から)



SK49土層断面 (北から)



縄文土器(1) 1:3



16



17



15



13



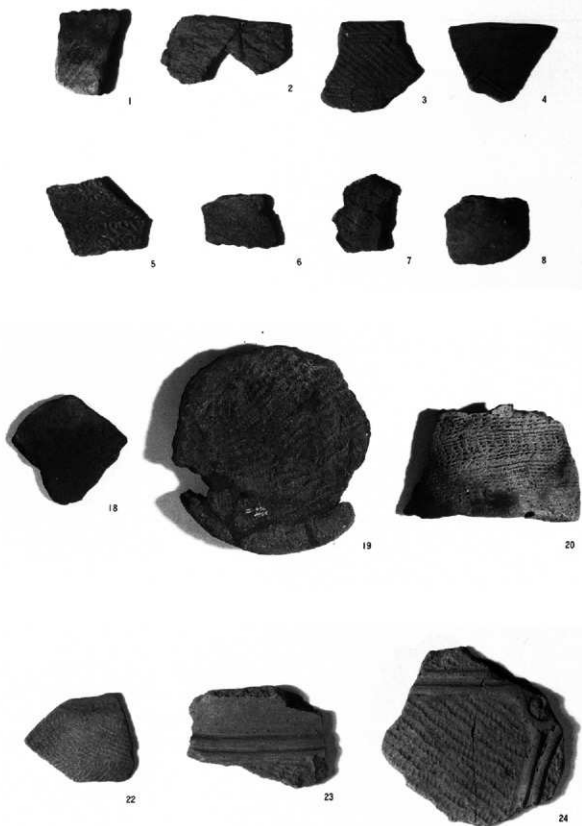
21

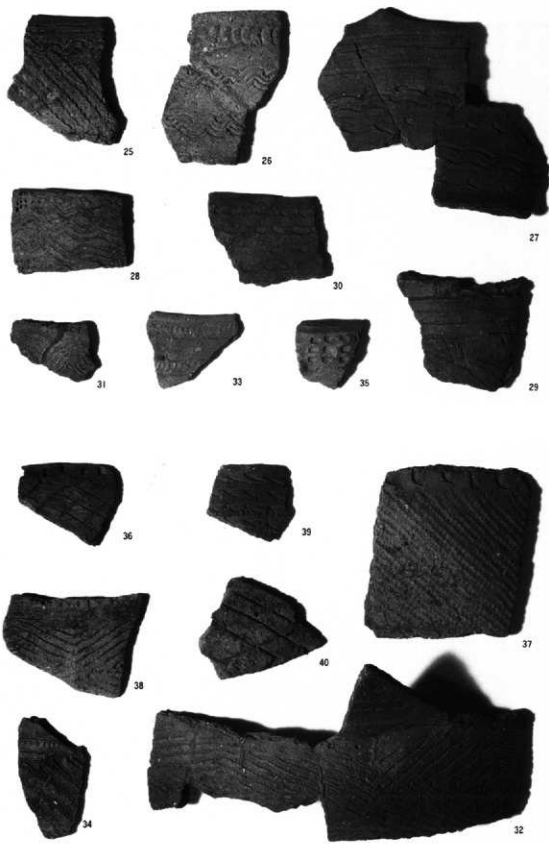


12



14





縄文土器(4) 1:2



42



41



45



47



46



48



43



44



49



51



52



53



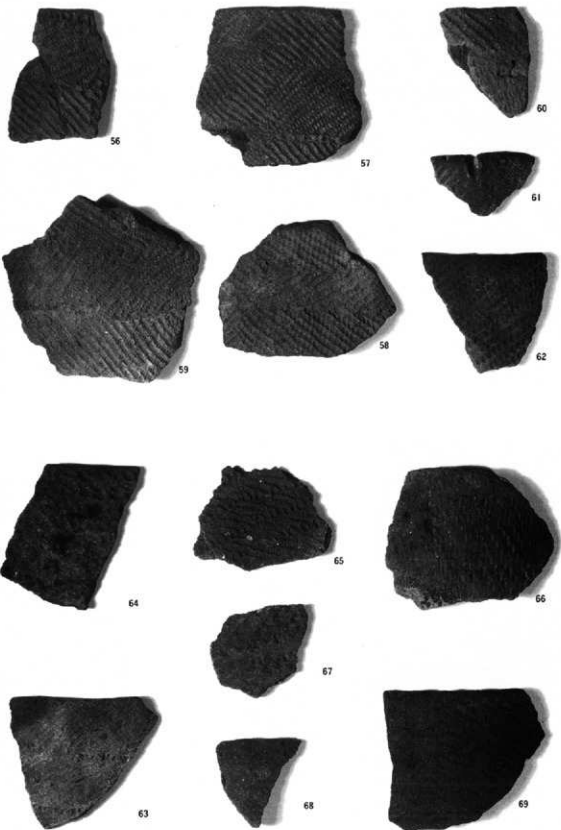
50



54

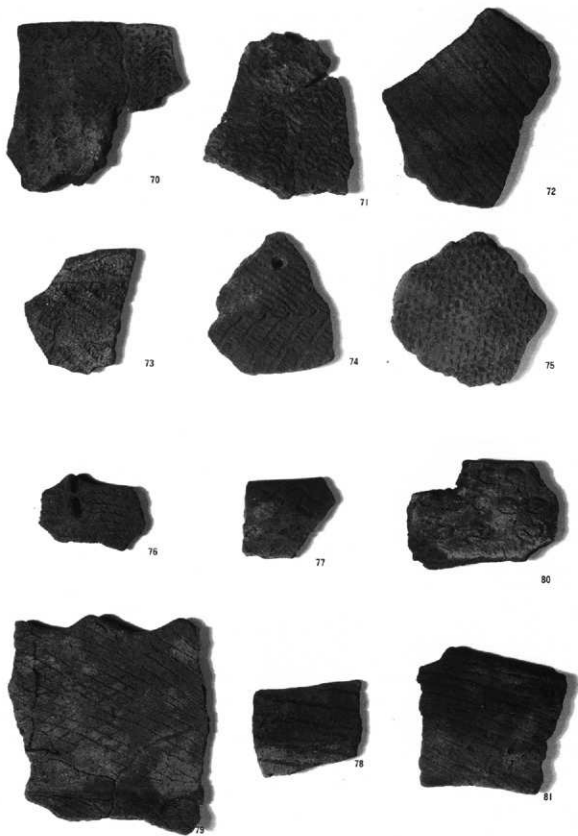


55



縄文土器(6) 1:2







82



84



85



86



87



89



83



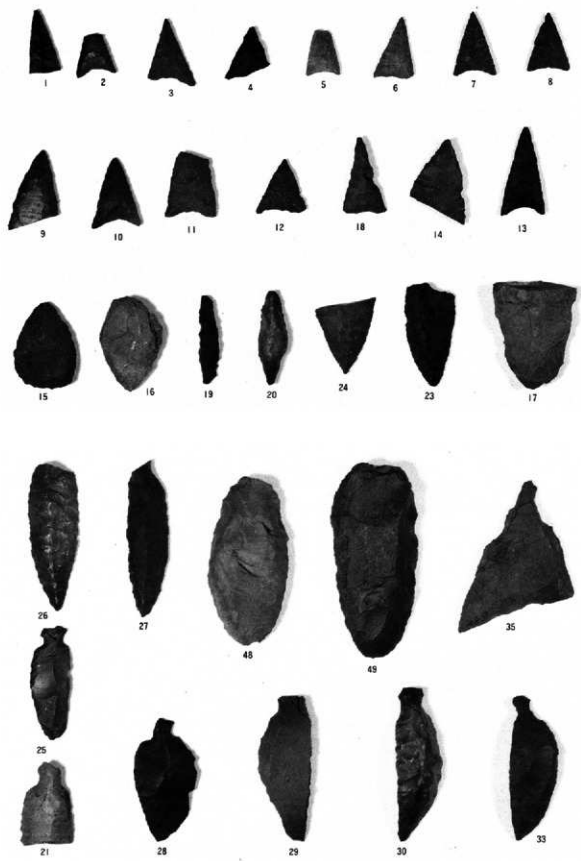
88

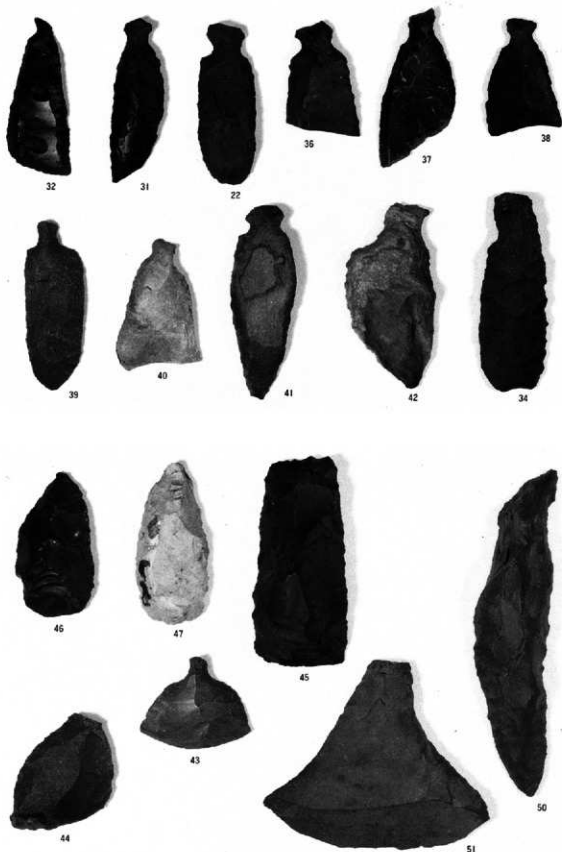


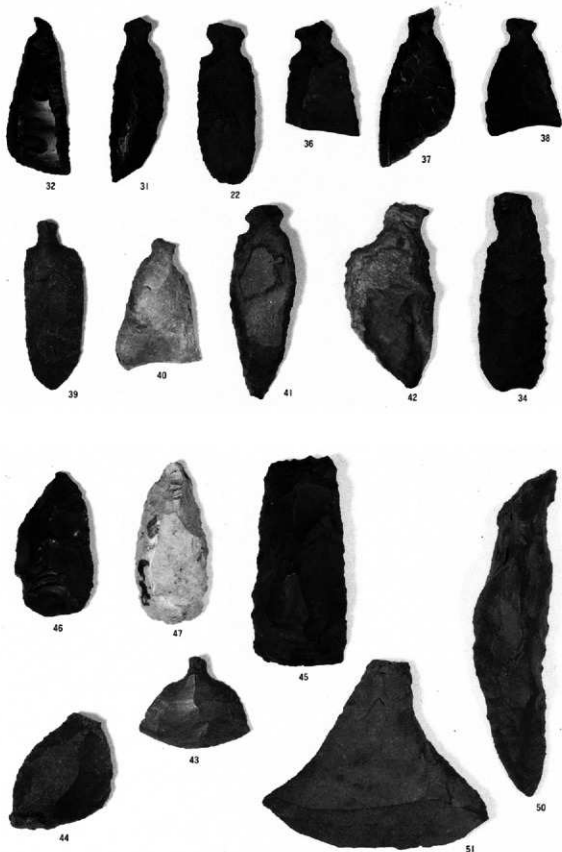
81



89







## 上荒谷遺跡SK23のリン・カルシウム分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

上荒谷遺跡は、立谷川中流右岸の立谷川扇状地扇央部に立地する、縄文時代前期前半の集落跡である。今回、前期調査区内で完形の深鉢（RP1）が逆さまにされた状態で埋められた土坑（SK23）が検出された。このような検出状態から、この土坑が墓坑である可能性が指摘されている。

そこで、SK23への遺体埋納の可能性を検討するために、動物遺体に多く含まれ、遺体の分解後も土壌内での移動が少ないとされるリン酸含量を測定するリン分析、あわせてやはり遺体に多く含まれるカルシウム含量を測定するカルシウム分析を実施した。

### 1. 試料

試料は、SK23覆土およびRP1内土壌より採取された4点（試料番号4～7）、対照試料として遺跡層序第1層～第3層より採取された3点（試料番号1～3）、合計7点である。

### 2. 分析方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考に示す。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコにはかりとり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

### 3. 結果

結果を表1に示す。

対照試料とした試料番号1～3では、リン酸含量が2.87～4.44P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gを示し、下位ほど高い含量である。カルシウム含量は1.03～3.92CaOmg/gであるが、リン酸含量のような傾向は認められない。

表1 SK23・RP1関連試料のリン・カルシウム分析結果

試料番号	試料採取位置	リン酸含量 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
1	遺跡層序第I層	2.87	3.92	2.5Y2/1黒・L
2	遺跡層序第II層	4.24	1.30	2.5Y2/1黒・L
3	遺跡層序第III層	4.44	1.59	2.5Y2/1黒・L
4	SK23第1層 (覆土上部)	7.23	3.61	10YR2/1黒・L
5	RP1 窠内土壤	4.90	2.27	10YR2/2黒褐・L
6	SK23第3層 (覆土底部)	4.00	1.73	10YR3/4暗褐・L
7	SK23第5層 (覆土底部)	5.08	2.74	10YR2/2黒褐・L

土性:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

土色:土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性の判定法による。

L…壤土(砂と粘土を半々に感じる)

SK23試料では、試料番号4(SK23覆土第1層)がリン酸含量、カルシウム含量とも最も高い含量を示す。特に、リン酸含量は対照試料と比較しても高い。また、試料番号7(土坑底部第5層)もリン酸含量が対照試料と比較して高い含量であり、カルシウム含量も対照試料の試料番号2・3(遺跡層序第II層・第III層)と比較すれば高い値である。また、RP1試料もリン酸含量が対照試料よりも高く、カルシウム含量は対照試料の試料番号2・3と比較して高い。

#### 4. 考察

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告例(Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991)によれば、上限は約3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g(黒ボク土の平均値)という報告例がある(川崎ほか,1991)。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1~50CaOmg/g(藤貫,1979)とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を指摘できる。

対照試料とSK23覆土・RP1内土壤のリン酸含量は、遺跡層序第I層を除いて、天然賦存量よりも高く、既耕地の調査例と同様あるいは高い含量を示した。また、SK23覆土第1層では対照試料とした遺跡層序よりも高い、あるいは近い値を示した。これより、第1層中にはリン酸やカルシウムが富化していることが指摘でき、遺体などの内容物の痕跡が残留していたと思われる。SK23覆土底部第5層でも比較的高い含量を示すことは、SK23覆土第1層より下部に遺体成分が流下したために富化した結果を思わせる。

また、RP1内土壤はSK23覆土第1層からの遺体成分の流下の影響とみるには高い含量を示す。この点は、遺体などの内容物が存在したことを示唆する。

今回の結果は、土坑に埋設された深鉢だけでなく、土坑覆土にも遺体の埋納の可能性が指摘できた。この点は、土坑墓の構築方法や基制などを考える上で重要と考える。

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第37集

上荒谷遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 株式会社 田宮印刷所

---